

「看護実践能力の向上に関する研究-成人看護学領域のシミュレーション演習の評価-」

研究代表者氏名 (看護学部) 及川紳代

研究参加者氏名 (看護学部) 内海香子、小澤尚子、藤澤由香、平沢貞子

<要旨>

本学の成人看護学領域では、学生が臨地実習の前に既習の知識・技術と臨床との乖離を埋め、より実践に即した経験ができるように、演習科目でシミュレーション演習を取り入れている。平成 27 年度はその評価として履修学生を対象に質問紙調査を実施した。それに基づき、平成 28 年度は演習内容や方法を見直し、改善を図った。その結果、演習後の質問紙調査において、授業過程評価と学生の達成度が向上しており、改善傾向がみられた。ここでは、平成 28 年度の調査結果について報告する。

1 研究の概要

平成 27 年度の調査において、シミュレーション演習の時間配分や学生のグループ人数調整等に改善の必要性が示唆された。平成 28 年度はそれらの改善を図り、演習実施後の評価を目的として質問紙調査を実施した。

2 研究の実際

1) 調査方法

対象者：平成 28 年度に成人看護学の演習科目を履修した 3 年次学生 86 名。調査期間：平成 28 年 5 月下旬。調査方法：演習終了時に無記名自記式質問紙を配布した。回収箱を設置し 1 週間後に回収した。

2) 質問紙の内容と分析方法

①「授業過程評価スケール-看護技術演習用- (舟島, 2009)」(以下、「授業過程評価スケール」): 39 項目を得点化 (1~5 点) し、総得点 (39~195 点) と I~VI の下位尺度得点の平均値を算出した。

②演習目標に対する学生自身の達成度 (10 段階評価)：単純集計し、度数分布で示した。

③演習に対する意見(自由記述)：内容の類似に従い、整理した。

3) 倫理的配慮

研究目的と方法、回答は無記名であり成績には一切関係せず、自由意思による参加であること等を説明した。岩手県立大学研究倫理審査を受けて実施した。

4) シミュレーション演習「手術直後の観察」の概要

演習目標：①看護師 3 人で手術後帰室時の患者の状態を観察できる。②観察した結果をふりかえり、患者の状態をアセスメントできる。

場面：50 歳代女性。幽門側胃切除術後、病棟に帰室した。

行程と時間配分(計 160 分)	演習の内容(下線 :H28 の改善点)
オリエンテーション	30 分 ・必要な観察項目の確認(資料・DVD) ・演習目的、モデル人形等の確認
準備	30 分 ①観察項目や方法を各グループで検討 ②グループ内での役割分担と打合せ
実施とデブリーフィング	80 分 ①1回8分、計4回実施する。(各10分 :実施8分+片付け・準備2分) ②1回ごとに振り返りを行う。(各10分)
グループワーク	20 分 ・観察結果を基にアセスメントを話し合う。

演習の構成：学生 86 名。昨年度よりグループを少数化し 4~5 人ずつの 20 グループ編成とした。グループの学生全員が取り組めるように看護師役・記録係に役割分担し、実施回数は 4 回に増やした。モデル人形は 5 体設置し、1 体につき教員 1~2 名で 4 つのグループを担当した。

3 結果

質問紙の回収数 51 (回収率 59.3%)、有効回答数 47

1) 「授業過程評価スケール」の結果

総得点の平均値とすべての下位尺度が「学生の評価が平均的な演習」である中得点領域に位置し、昨年度、低得点領域であった下位尺度 I、II、VI で改善がみられた。

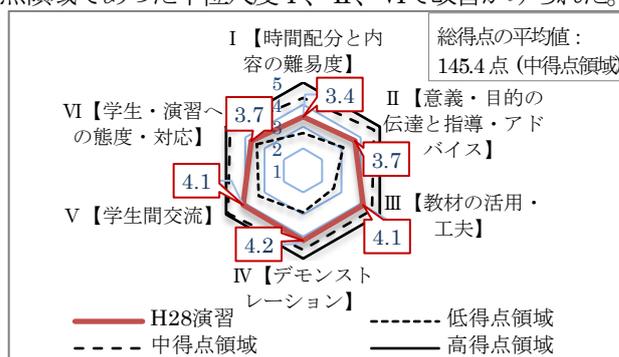


図 1：高・中・低得点領域および H28 演習の得点状況

2) 演習目標に対する学生自身の達成度

中央値は「7」であり、昨年度の「6」よりも向上した。



図 2：演習目標に対する学生自身の達成度

3) 演習に対する意見 (自由記述)

「実際の患者を意識でき、座学よりもイメージが膨らんだ」、「学生か先生がシミュレーターをする方が患者への配慮や気遣いを想像しやすい」などがあつた。

4 今後の課題

今後は目標に対する学生の成果を評価し、それに基づいて、さらに効果的なシミュレーション演習となるように検討していく必要がある。

<引用文献>舟島なをみ(2009)：看護実践・教育のための測定用具ファイル第 2 版, 109-117, 医学書院